

〔館員随想〕

日本美術を見る眼
— 第九回JAWSに参加して —

「JAWS」というと著名なハリウッド映画を思い起こしますが、そうではありません。

「The International Workshop on Japanese Art History for Graduate Students (日本美術史研究に関する国際大学院生会議)」の略称です。日本をはじめ欧米の大学院博士後期課程に籍を置く、日本美術史を研究している若手研究者が集まり、研究発表や作品調査を行う国際会議です。昨年の11月末から12月上旬にかけて、同会議に参加する機会に恵まれました。アメリカ・シアトルを中心に、西海岸の美術館で開催された会議の様子を報告させていただきます。

9 回目を数えるJAWSですが、第1回は1987年、東京大学を会場に開催されました。以後第2回は1988年にロサンゼルス・心遠館財団の主催で、第3回は1990年に上智大学で、第4回は1993年にコロンビア大学で、第5回は1997年に学習院大学、第6回は1999年にプリンストン大学、第7回は2003年に慶應義塾大学でと、過去7回が日米交互に開催されました。第5回からは、アメリカのみならずヨーロッパ、アジア、オセアニア地区などの大学院からも参加者を募り、研究交流の

輪が広がりました。そして第8回は、ヨーロッパで初の開催となり、イギリスのセインズベリー日本藝術研究所を当番機関として、一昨年に開催されました。会議には、日本及び海外の大学から、それぞれ10名程度の参加者が集まります。今回は、日本・アメリカ・イギリス・ドイツ・イタリアから21名の参加者が集いました。

日程の前半は、シアトル美術館を会場とした研究発表です。「Opposition and Fusion in Visual Art (美術における対立と融合)」という統一テーマのもと、各々の研究対象に即した発表が行われました。扱われた領域は幅広く、仏教美術、中世・近世絵画、陶磁史、近現代美術などが挙げられます。

また、内容は、図像解釈をはじめコレクション形成、ジェンダー論、受容史、美術批評など、美術史をめぐる様々な問題が取り上げられました。発表後は、それぞれの専門や立場から、活発な質疑応答が行われます。筆者は、大英博物館に所蔵される、平安時代末から鎌倉時代初め頃に制作された仏画について発表しました。在外美術作品ということで参加者の関心も非常に高く、本来用いられた寺院という場を離れ、海外の美術館で現在展示

されることについてどう考えるか、あるいは仏画は美術館においてどのように展示されるべきかという、海外の研究者ならではの視点から、仏教絵画の本質に関わる、新鮮な指摘を受けました。

後半は作品調査です。現地の美術館の惜しみない協力により、実際に作品を前にして、専門分野や国籍の異なる参加者と議論しながら調査を行うことが出来ました。シアトル美術館の他、サンフランシスコ・アジア美術館、クラーク財団日本美術研究所を訪れましたが、実践的な経験を積むだけでなく、作品を見る眼の多様さを実感しました。

およそ二週間の旅程でしたが、同じ日本美術を研究対象としていても、研究者個人の置かれた環境により、研究方法や関心の所在、着眼点が異なることを痛感させられました。当然のことのように思いますが、日本人あるいは国内の研究者同士のやりとりでは、差異は見えにくいのです。今回の発表では、欧米在住の研究者には、作品を取り巻く環境や概念を論じる傾向があり、個々の作品に密着し、図像や表現様式を詳細に論じる傾向が、国内在住の参加者に見られました。

発表は英語で行ったのですが、初めてのことでかなり骨を折りました。最も苦労したのが語彙の選択です。すなわち、仏教美術では様々な尊名が使われます。漢字表記であれば共通の認識が得られますが、口頭発表の場合は複雑です。尊名を英訳する際、原則としてサンスクリット名が用いられます。釈迦如来であればŚakyamuni (シャークヤムニ)、文殊菩薩はMañjuśrī (マンジュシュリ) となります。しかし、梵天や帝釈天などヒンズー教と密接な関係がある尊格は、それぞれBrahma (ブラフマー)、Indra (インドラ) と訳出しても、かえって仏教の尊格という性格からはかけ離れてしまいます。経典の場合も同様で、法華経をLotus sutraと逐語訳しても正しく相手に伝わるとは限りません。

また、日本語では同じ単語でも、状況に応じて訳し分けることが必要な場合があります。例えば、絵師

という単語です。文字通りpainterという単語がありますが、職人的な意味合いを強調したいときはartisanという語がありますし、より個性を重視するならばartistが適する場合もあるでしょう。

要するに、一語一語の言葉の意味をはっきりと規定していくことが重要なのです。日本語が分かる相手に日本語で発表する際には、暗黙の内にこうした概念は共有されており、特に意識することなく同じ土俵に立って議論をすることが出来ます。しかし、日本美術を日本語以外の言語で語る場合は、まずこの土俵をきっちりと造ることから始めねばなりません。限られた時間の中でイタイコトを明確に伝えることの難しさを非常に強く感じました。

今回のJAWSへの参加を通じて、欧米在住の日本美術史研究者の方法論や関心の所在を知ることが出来、併せて自分の研究方法との相違や類似を認識しました。さらには、同じ学問領域にいる参加者同士に友情が生まれ、後々まで有意義な関係が続いていくことが大いに期待されます。この貴重な経験を糧とし、今後の業務に活かしていきたいと思います。(古川攝一)

図2 サンフランシスコの街並み



図1 シアトル美術館外観



季刊 美のたより No.162

平成20年4月4日

発行 大和文華館